

風景が映る家

美しい海、山、森。伝統ある産業や祭りの様子。同僚やご近所さんとの交流。リアカーを引いて魚を売る魚屋さん。船の帰りを待つ港。夫の帰りを待つ妻、家族。これらは、輪島の風景であり、個性である。これらの風景こそ、古き時代から今日まで時を積み重ねるようにして出来上がった輪島らしさであり、これからそのままと、家と、人と共に培われていくべき文化である。しかし、近年普及が進む工業的住宅は、風景やそれらとの関係の均質化を促している。ならば、住まい方の変化を許容しながらも、時を重ねて形成されてきたその時代の、そのまちの「らしさ」が表出する住宅をつくることはできないだろうか。



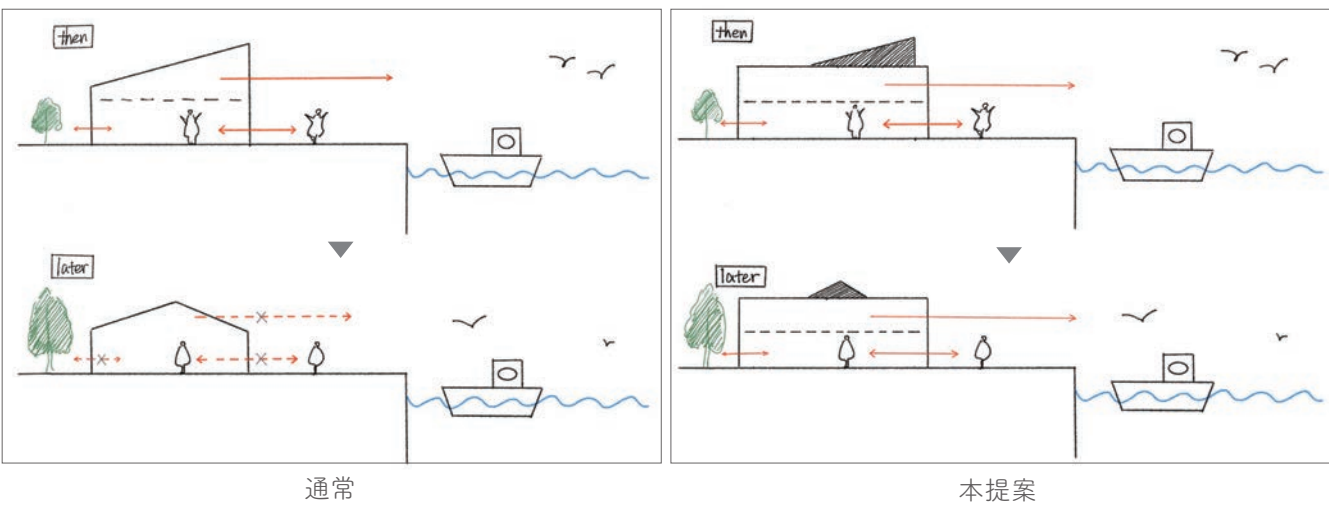
I. 敷地：石川県輪島市輪島崎町

敷地は石川県輪島市の港に面した通りの一角。敷地周辺は山・海・漁港に囲まれており、輪島の子どもたちは、森で虫を捕まえ、海に潜り貝を取るなど、日常的に輪島の恵に触れている。輪島独特の時間がゆったりと流れるような風景は、ついぼーっと眺めたくなるような魅力がある。敷地周辺の住宅群は港に面して切妻屋根が並んでいることや、魚を干す小部屋、玄関先の蛇口など、ここならではの設えや風景が窺える。



II. 設計趣旨：「変化の許容と時の積層」

今まちにあふれる、コスト・機能性・安全性を追求した工業的住宅は、まちの風景の均質化を促しており、それは時を重ねて形成されてきたそのまちの風土やアイデンティティの損失に繋がっている。再開発や復興を計画するまちにおいては、特にその影響が急激に、また顕著に現れるだろう。また、時代や外的要因によって建物に求められる需要は変化する。住まい方や住む人の変化と共に家のカタチやしつらえ、ひいては建物自体も変化していく。しかし、そのような変化が起こったとき、日常の風景の中で「らしさ」が見えづらくなってしまう。そこで本提案では、住宅の設計に一任されていた暮らしと「らしさ」の関係を、両者の間に RC 造の強固な余白空間を挿入することで繋ぎ続ける。居住空間である木造部分は、住まい方や時代によって柔軟に変化できる空間である。RC の余白空間は建て替えを行わず、住まい方の変化を許容しながら、住み手によってその時の輪島らしい生活が表れる舞台となる。そうすることで、暮らしと時を重ねて形成されてきたその時の輪島らしさの関係を繋ぎ続けていく。また、この家に住まう家族は、漁師の夫と役所で働く妻、2人の小学生の息子の4人家族を想定する。



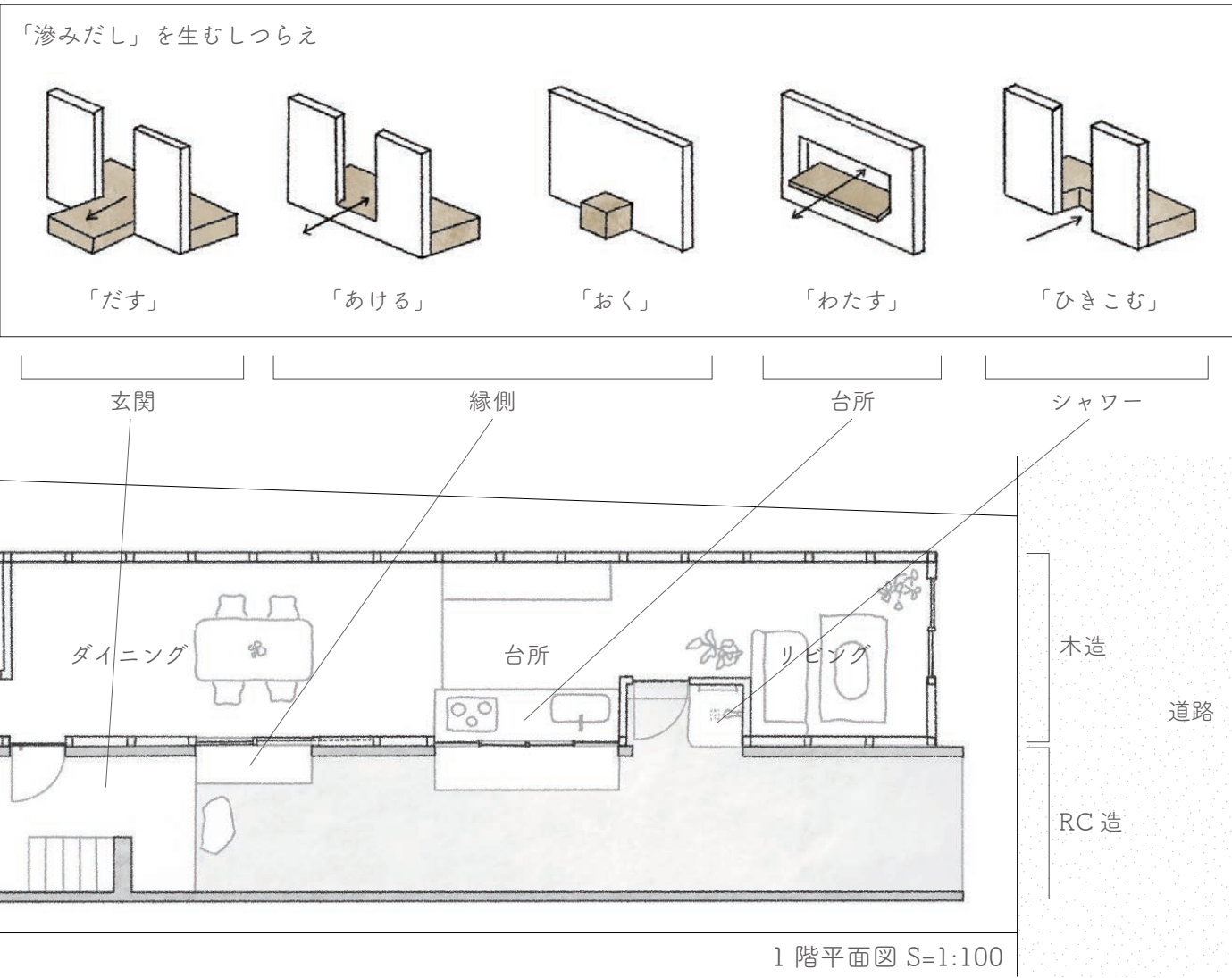
III. 手法：余白空間の構成

1階：滲みだしの間

1階では、その時代や住み手独自の「輪島らしい生活」が滲みだすきっかけを施す。

「だす」ことで流れを止め、「あける」ことで往来を生み、「おく」ことで個性を出し、「わたす」ことで対話を生み、「ひきこむ」ことで変化をつくる。

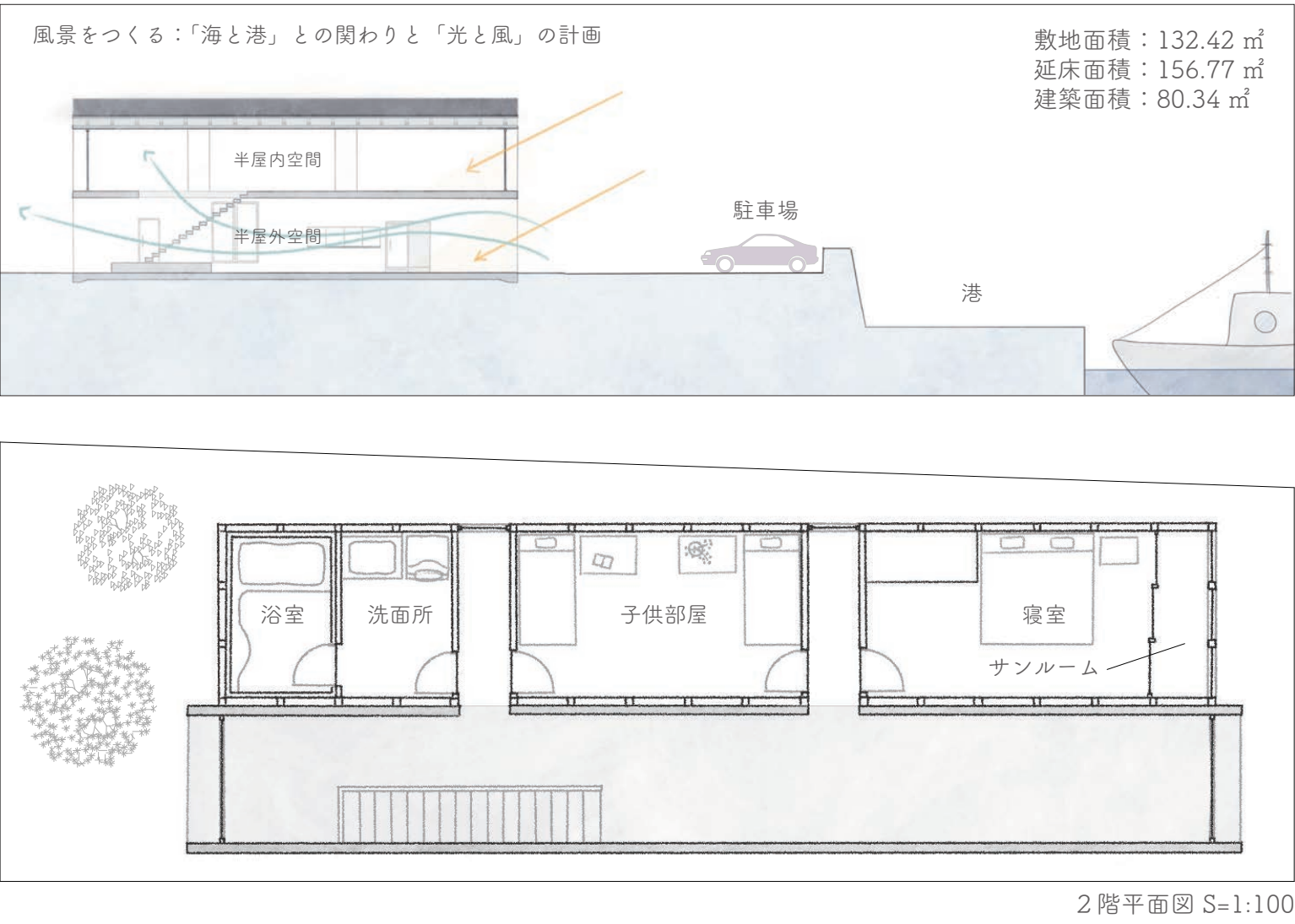
これら RC の開口によるしつらえは時間が経っても変化しない。そのため、住まい方の変更時には、余白空間との関わり方を考えることで、暮らしの中に「輪島らしさ」が滲みだす。



1階平面図 S=1:100

2階：望楼の間

2階では、輪島の海や港の風景を RC のスラブと壁によって絵画的に切り取りながらも、上下階をつなぐ動線空間としてしつらえを与えずに計画することで、風景が RC 空間のどこから望んでも印象的に映り、その移ろいを日常的に体感できる望楼の間となる。機能のない空白的な空間は、住まい手の習慣の中に、輪島の風景に対面する瞬間を生み出す。同時に、階段から各部屋への動線から外れた余白空間の突き当りでは、輪島と人の完全な 1 対 1 の関係を作り出す。また、輪島の美しい風景を日常の中で体感できるように、この望楼の間は、半屋外空間の 1 階からわずかに風を受け入れる「半屋内空間」とする。屋内空間と同様の扱われ方をしながら、外の光や風、温度感を受け入れることで、住まい手は輪島の風景を体感しながら、風景とともに暮らししていく。



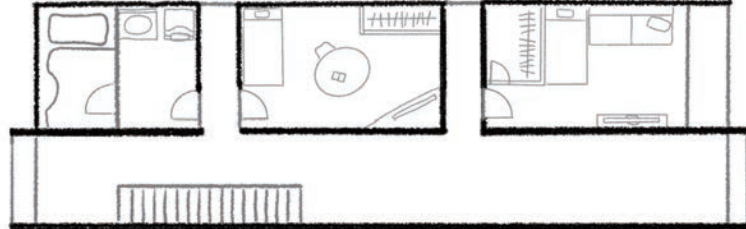
2階平面図 S=1:100



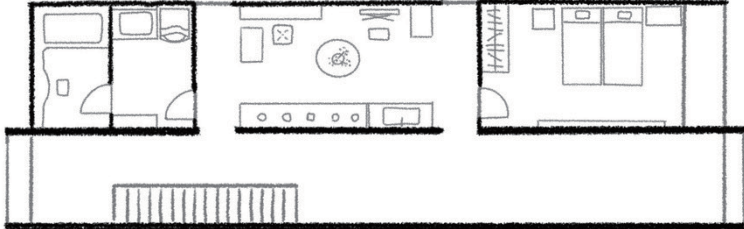
FASE 1: 4人家族の家



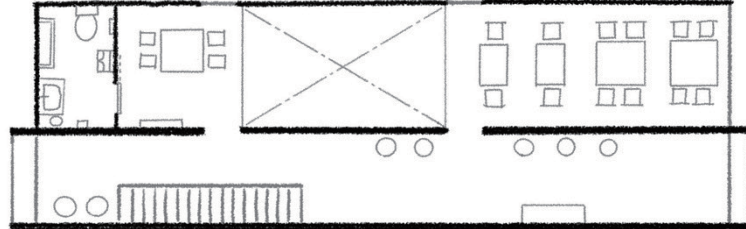
FASE 2: 夫婦の家



FASE 3: 趣味の家



FASE 4: 新たな活用



間仕切りによって中央の 1 室を 2 つに区分けすることで、2 人の子供の部屋として利用する。1 階では、例えば遊びに行く、あるいは外から帰ってきた子供たちと、台所の開口を通じて会話を交える。子供が貝や虫を捕ってきた際には、手前のシャワー室で汚れを洗い落としてから家に入る。

2人の子どもが巣立った後は、子ども部屋を客室とし、民泊を営む。また 1階では、例えば知人の漁師やご近所さんとの井戸端会議の際には、家に上げずとも玄関前に居座るしつらえを施し、台所から出されるお茶やお菓子をつまみながら話を弾ませる。

趣味として絵画や漆器の制作を始めた夫婦は、2階の 1室を工房とし、RC 空間の 1 階をギャラリーとして利用する。また漆器などを乾かすときにも風通しの良い 1 階空間を使って乾燥させる。制作風景や作品が輪島のまちと共存する様子を、住み手や通りを歩く人は見ることができる。

新たな住人が住み入った後、例えばこの家は住居兼食堂として利用される。1階の台所は注文カウンターとなり、2階の寝室や子供部屋は店内座席として利用される。このようにして、この家は住み手によってカタチを変えながら、その時の輪島の風景を映し出す。

